

めざせ エコピーパール

eco検定(環境社会検定試験)合格対策講座 第1回

佐々木 進市
(環境カウンセラー全国連合会)

■はじめに

「エコピーパール」は、東京商工会議所が2006(平成18)年から実施しているeco検定(環境社会検定試験)合格者に与えられる呼称である。環境と経済が両立する「持続可能な社会」の形成に向けて、環境に関する幅広い知識を持ち、社会で率先して環境問題に取り組む“人づくり”を目指すのが、eco検定である。

東京商工会議所ではエコピーパールが2名以上所属している事業所団体を「エコユニット」として認定する事業も実施している。また、エコピーパールになった方を、希望する分野に応じてさらに専門性を高めた「エコリーダー」として認定する事業が今年の7月からスタートしている。

2008(平成20)年5月末現在のエコピーパールは27,545名である。

本講座では、eco検定に合格するために必要な公式テキストの要点を、テキストの目次の節単位で分かりやすく解説する。なお、合格を確実にするために東京商工会議所編著、日本能率協会マネジメントセンター発行の「公式テキスト」と、「過去・模擬問題集」をお手元に置きながら、本稿を読んでいただくことを希望する。

■eco検定が大ヒットしたわけ

2年間という短期間に27,545名もの合格者が誕生し、今後もその勢いが止まりそうもない大ヒット検定であるeco検定には、どんな魅力があるのだろうか。

まず、子供から高齢者まで年齢を問わず受験できること。また、主な出題元である公式テキストが取り扱う対象範囲の広さと、文科系、理工系を問わない分かりやすい解説があげられる。このようなテキストは今まで、ありそうでなかったからだ。しかし、最大の要素は「エコピーパールになろう」という受験者の「地球人としての使命感」に火をつけたこ

とであろう。みんな地球環境に異変がおきていることを肌で感じ始めているのだ。自分にできることは何か、みんながそれをさがし求めていたところへ、タイミングよくエコピーパールになるためのeco検定が始まったのだと思う。

今年、京都議定書の約束期間(5年間)の最初の年でもある。また、今月7日から9日まで、北海道洞爺湖サミットも開催された。すべてはこれからである。地球を救うことは自分や家族、子孫を救うことに通じるだろう。このような志をもつ方はぜひeco検定を受験してみてください。

そして、みんなでエコピーパールになろう!

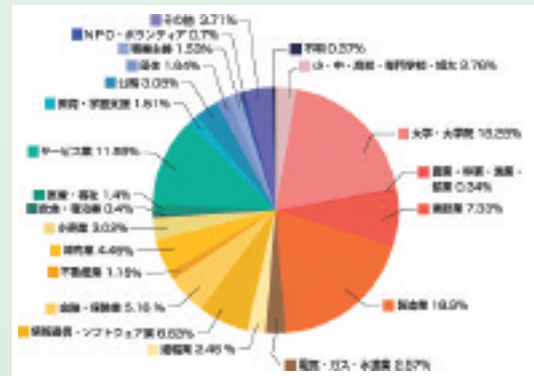


合格すると送られてくる合格証
(出典:東京商工会議所)

■出題範囲・合格点・試験方法

問題は、基本的には公式テキストから出題されるが、最近の時事問題について、環境省が公表する「環境白書・循環型社会白書(注:2つは合本されて発売されている)」からも一部出題される。

合格ラインは100点満点の、70点以上。試験方法は制限時間2時間



eco検定受験者の業種

(出典:eco検定受験要領 2008年度版)

のマークシート方式による選択問題による。

■ 2008年度の試験日と問合せ先

2008年度の試験日は7月20日と12月21日である。本誌で初めてこのことを知った読者が受験できるのは12月21日（日）である。申し込みは10月7日から。今からでも準備に十分な時間が残されている。

全国の試験会場、公式テキストや過去・模擬問題集の購入などについては、下記まで問い合わせていただきたい。なお、「環境社会検定試験」、「eco検定」は東京商工会議所の登録商標である。

東京商工会議所 検定センター
03-3989-0777
(土日・祝日、年末年始を除く
10:00～18:00)
<http://www.kentei.org/>

今回の解説対象範囲

第1章 持続可能な社会に向けて

1-1 『世界がもし100人の村だったら』

- 1) もし100人の村だったら
- 2) グローバルに語り継がれる民話
- 3) Think Globally. Act Locally.

1-2 地球環境問題

- 1) 地球環境問題は複雑
- 2) 持続不可能な社会
- 3) 問題解決のためには
- 4) 環境と経済の両立には

1-3 持続可能な社会に

向けた取り組み

- 1) 持続可能な社会を構築する要素
- 2) 環境教育の方法と役割は？
- 3) 環境教育推進法を活かすために
- 4) 持続可能な開発のための教育(ESD)
- 5) 持続可能な社会に向けて

(出典：東京商工会議所編著「改訂版eco検定公式テキスト」)

1-1 『世界がもし100人の村だったら』

第1章のメインテーマは「持続可能な社会」である。

社会がいまの状態、いつまでも続いていけるかを考えるためには、まず現状認識から出発する必要がある。世界を100人の村に例えた物語『世界がもし100人の村だったら』は、分かりやすい数字(比率)で世界の富の偏在や貧困の現状を把握できることから、多くの読者の共感を得ている。

これをThink Globally. Act Locally. という標語とつき合わせてみよう。Think Globallyは「世界がもし100人の村だったら」に対応するであろう。Act Locallyはどうか。実はここが一番重要な部分である。この意味を「なんでもいいから自分にできることからはじめよう」ととるだけでは不十分である。その前に、Think Globallyをしているはずだからである。

筆者から読者への質問「あなたは、『世界がもし100人の村だったら』に出てくる、世界の富を独占するアメリカ人ですか。それとも、清潔で安全な水を飲めない国の国民ですか。あっ、そうか、たぶん日本人ですよ。すると、どちらでもないですよ。では、あなたがThink Globallyから得たことはなんですか」

Think Globallyは「自分のおかれた世界的状況下における、しなければならないことさがし」であり、Act Locallyは「さがし出されたしなければならないことの中から、今できることを選択し実行すること」である。

1-2 地球環境問題

地球環境問題は原因と結果が広範囲に絡み合って発生しているので、

非常に複雑な問題であり、即効性のある解決策を見出すことはむずかしい。したがって、解決を先送りしていくしかないが、その間にも資源の枯渇や自然環境の破壊が進むため、いまの社会がこのままの状態が続いていくことは不可能のように思われる。この危機的状況を打破するためには、Act Locallyで目覚めた一人一人の行動が必要である。その行動を支えるものは、結局のところ経済(お金や何かと何かを交換するルール)であるから、環境を優先してもなお成立する経済の仕組みが地球規模で新たに構築されなければならないであろう。環境と経済を対立概念とする見方では持続可能な社会を生み出すことはできないのである。

1-3 持続可能な社会に向けた取り組み

持続可能な社会を構築する要素として、「制度」、「技術」、「意識」の3つがあげられるが、持続可能な社会とは地球規模で実現されるものであり、先進国や開発途上国を別々の社会としてとらえ、各々が独立して持続していくことを目指しているのではない。先進国と開発途上国が共生できてはじめて、地球規模での社会の持続が可能になることに注意してほしい。

① 持続可能な開発

「持続可能な開発」とはSustainable Development (SDと略すこともある)の和訳である。Developmentを「開発」と訳したことについて、土木工事など自然破壊をイメージさせるなどとして異論をとる識者もいる。一部の論文などでは「開発」のかわりに「発展」をあてているのもそのためである。

この言葉が最初に提起されたのは1980(昭和55)年、IUCN(国際自然保護連合)が、UNEP(国連環境計画)、WWF(世界自然保護基金)